卒業論文

身体的部位「顔」の意味拡張について

――認知言語学的見地から――

鈴　木　拓　真

第一章　はじめに

1.1 研究背景

日本人は日本語を母語にしながらも言語に対する知識は不十分なところが多くある。日本人同士の会話でも「この意味は違う」といった誤用への指摘を多く見受けられることから日本語の難しさを痛感する。英語における必須語彙数[1]が3000語弱に対して、日本語の必須語彙数は7000語以上であることから第二言語としての日本語を習得するのはいかに難しいか、日本語母語話者でもなぜ日本語において不十分なところがあるのかが分かる。世間では言語は生き物と呼ばれ、時代の流れとともに変化するものであるとされている。特に日本語はその新陳代謝が激しいとされており、近年SNSの普及によりネットスラングなどを含めた若者言葉の誕生が後を絶たない。それは言葉遊びが好きな民族性ゆえの現象でもある。本稿のテーマである身体的部位の一つである「顔」も近年新たな意味拡張が見られたとされている。それは「しょうゆ顔」、「塩顔」といった複合的な単語であり、顔を調味料で例えるという意味拡張である。これらは主に男性の顔の系統を指し、それらの顔の系統を区別する要素は目や鼻の形、肌の白さ、顔の骨格などで分類されている。時代の変化とともに意味拡張もされ続ける多義語について調査することで、新たな発見があるかもしれないというのが本研究にいたった経緯である。

今回研究する多義語とは一つの単語から意味的に関連が認められる複数の意味を作り上げる語のことである。例えとして「打つ」という動詞を挙げる。この動詞だけで3つの意味を持つ。

1　必須語彙数とは一般的な文章を読み、理解できるレベルを指す数値である。

1. 釘を打つ：物理的にものに対して衝撃を与えること。基本的に能動的な文章で用いられることが多い。
2. 心を打つ：何か作品によって心が動かされ、感動するさま。基本的に受動的な文章で用いられることが多い。
3. 芝居を打つ：相手を信じ込ませるために嘘を言ったり、見せかけの振る舞いをする様。基本的に能動的な文章で用いられることが多い。

「打つ」という動詞だけで物理的な表現から比喩表現法により意味が拡張され、このように一つの語をさまざまな場面で使うことができるのは難しさと利便性を兼ね備えていると感じる。

1.2 本研究の目的

本研究では、以下の 2 点を解明することを目的とする。

・多様な意味を持つ「顔」という名詞はどのようなメカニズムによって意味拡張され、人々に認識されているのかを考察する。
・コーパスデータから共起するコロケーション情報を抽出し、その前後にはどのような動詞や名詞、形容詞などが共起しやすいのかを実証的に解明する。

本研究の対象である「顔」は誰もが持っているものであり、日常的に様々な場面で使う名詞である。外面的な「顔」、内面的な「顔」、社会的な「顔」があり、それぞれの意味は状況に応じて無意識に使い分けられている。

本稿では、第一章で本研究のきっかけと研究背景、研究目的を述べ、第二章では「顔」に関する先行研究をまとめた上で、本研究の意義を考える。第三章では調査概要を述べ、第四章では調査結果の分析と考察を行う。最後の第五章では本研究のまとめと今後の課題をまとめていく。

第二章　先行研究

2.1 先行研究のまとめ

多義語「顔」に関する研究には有薗（2006）、田中・ケキゼ（2005）、皆島

（2019）などがあり、有薗（2006）は「顔の意味拡張」、田中・ケキゼ（2005）は「日露語間の使用実態の比較」、皆島（2019）「多義語の意味拡張の特徴」をそれぞれ扱っている。第二章ではこれらの先行研究を概観した上で、本研究の位置づけ、本研究の意義を述べる。

有薗（2006）では、「顔」についてメトニミー、メタファーなどの意味拡張の仕組みを考察し、概念間の関係を明らかにしている。有薗（2006）によると、「顔」には構造的側面、機能的側面、位置的側面、形状的側面が存在する。構造的側面からは化粧、人の個性といった意味に派生している。例として「顔を直す」「顔のない生徒」などが挙げられる。その人物の特徴を表したりして、化粧が顔と空間において隣接しているためメトニミーによる意味拡張である。機能的側面からは表情の意味に派生している。「顔がひきつる」「顔が緩む」などが挙げられる。人が何かしらの感情を抱いた際に顔面の筋肉が変化することによってその人自身の感情が分かるので、これはメトニミーによる意味拡張である。位置的側面からはメトニミーにより人、対面、関係や人脈の意味を持つようになったとされている。「顔が揃う」「顔を合わせる」「顔が広い」などが挙げられる。「顔」は部分と全体の関係に基づいて人を表すだけでなく、他者を認識するのに重要な役割を持つ。これは身体的重要性と社会的重要性の類似性に基づいてメトニミー、メタファーによる意味拡張となる。有薗（2006）では「顔」の各意味機能の使用実態など実証的な調査は行われていないという問題は残るが、構造的な解析を行ったという点に意義があると考える。

田中・ケキゼ（2005）では、日露語間における「顔」の意味機能の比較を行っている。日露両語における「顔」の基本義、拡張義の用法の重なりとずれを分析し、それぞれと結びつく概念の違いを考察している。その結果、「顔」は個人を象徴するシンボルであるが、それがどの側面に焦点を当てているかは日露語間では異なるということを明らかにしている。しかし、この論文も有薗（2006）と同様に、内省に基づく分析がメインで、使用実態調査に基づいた分析ではない。

皆島（2019）では、意味拡張には5つの特徴、傾向があると述べている。1つ目に文脈なしで最も想起されやすく、身体性・具体性が高い、文字通りの意味があること、2つ目に言語習得の早い段階で獲得される意味、3つ目に

他の転義を理解する前提となること、4つ目に使用頻度が高いことが多い意味、5つ目に慣用表現や比喩で使用されやすいことである。また、基本義を起点として「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」と呼ばれる3種類の比喩的認知により、語義が複数の方向への意味拡張が見られていると指摘している。皆島（2019）では多義語 ”hand” の使用実態調査が行われていないという疑問はあるが、一方で放射状カテゴリーを作成し認知意味論の観点から分析を行ったという点に意義があると考える。

2.2 本研究の意義

本稿では日常生活でよく使われ、かつ多様な意味を持つ「顔」を深く追及し、その意味拡張のメカニズム及び使用実態を明らかにすることに意義がある。多義語についての論文は数多く書かれている。しかし「顔」の使用実態に注目しながれその意味拡張に焦点を当てた論文は管見の限りあまり見られない。基本義・拡張義ごとの出現頻度、共起しやすい動詞や名詞、形容詞などが研究されていない。本稿ではそれらを明らかにすることで多義語「顔」の新たな発見に繋がると考える。

2.3 多義語「顔」の意味

本研究対象の多義語「顔」の意味を明確化するために、まず日本でよく使用されている3冊の辞書『大辞林』『デジタル大辞泉』『日本国語大辞典』から「顔」の意味を概観した上で、本稿における「顔」の意味の定義づけを行う。

2.3.1『大辞林』（第三版）

① 顔の前面。目。鼻・口などがある部分。「－を洗う」「－を見合わせる」

② （①によって表される）人。「見られない－」

③ 顔かたち。顔だち。「美しい－」

④ 心の動きが表れた、顔の様子。

1. 表情。「喜ぶ－が見たい」「－を曇らせる」

2. 態度。「大きな－をする」

⑤ その人の持つ評判。信用など。

1. 知名度。「－の売れた役者」

2. 影響力・勢力。「この辺りではちょいとした－だ」
3. 面目。名誉。「－にかかわる」「私の－が丸つぶれだ」

⑥ その背後にあるものの代表となる人や事柄。「業界の－」「彼はチームの－である」

⑦ 物事のある一面。「大都会の知られざる－」

2.3.2『デジタル大辞泉』

① 頭部の前面。目・口・鼻などのある部分。つら。おもて。「毎朝－を洗う」

② かおかたち。容貌。「彫りの深い－」「かっこいい－」

③ 表情。かおつき。「浮かぬ－」「涼しい－をする」

④ 列座する予定の人。かおぶれ。成員。「常連が－をそろえる」「部活に顔を出す」

⑤ 社会に対する対面・名誉。「－をつぶされる」「合わせる－がない」

⑥ 一定の社会・地域における知名度、勢力。「あの店では、なかなかの－だ」

⑦ ある組織や集団を代表するもの。また、目立つ部分。「首相は日本の－だ」

⑧ 物の表面。姿。「月が山の端に－を覗かせる。」

2.3.3『日本国語大辞典』（第二版）

① 目、口、鼻などのある頭部の前面。つら。おもて。

② （比喩的に用いて）物の表面。また、一部分だけが外に見えているもの。

③ ①の状態、様子。
1. かおかたち。顔だち。容貌。
2. 表情。顔つき。顔いろ。
3. （比ゆ的に用いて）様子。態度。

④ 成員としての人。かおぶれ。

⑤ （①は人を見分けられる目立つ部分であることから）人によく知られていることや社会上の体面。
1. ある人や物を代表する一面。また、なにかにとって代表的な人や事柄。「表紙は雑誌の－だ」

2. 人によく知られていることによって得られた信用や評判。「木戸は－にて通り空腹。」

3. 体面。名目。名誉。

4. 一定の地域や仲間の間で勢力や名望のある人。顔役。

① （数字の5を人の顔に見たてたものか）「五」の数をいう符丁。

2.3.4 辞書の意味ごとの対応関係

本稿における「顔」の意味の定義付けを行うため、上記で調査した3冊の辞書の意味ごとの対応関係を表1にまとめる。共通する意味項目は「－」で引く。

表1 辞書ごとの意味関係

大辞林		デジタル大辞泉		日本国語辞典
①	—	①	—	①
②		④	—	④
③	—	②	—	③
④	—	③	—	③
⑤	—	⑥		
②	—	⑦		⑤
⑦		⑧	—	②
		⑤	—	⑤

2.4 本稿における「顔」の意味

2.3節では辞書3冊を使用し各辞書における「顔」の意味記述を調べた。3冊の辞書には共通する基本義・拡張義以外にも、異なる意味項目が多く存在していた。本稿では3冊の辞書の意味記述を参考にしながら分かりやすく意味を把握するために、表1の対応関係を鑑み、本稿での「顔」の意味を以下の5つに捉える。この5つの意味は多義語「顔」の多様な意味を分かりやすく捉えられるようにまとめたものである。

①目・口・鼻などが存在している顔の前面。「－を洗う」「－を触る」

②容貌。ルックス。「－がかっこいい俳優」「－が可愛い」

③顔の様子。表情、顔つき、態度などを指す。「－が暗い」「浮かない－をする」

④かおぶれ。成員。メンバー。「－が揃う」「－が集まる」

⑤地位や名誉、又はその組織での役職。「会社の－」「球団の－」

2.5 多義語「顔」の意味拡張メカニズム

2.4節にてまとめた5つの意味分類を認知意味論で多義語の意味拡張を分析する際によく利用されるメタファー・メトニミー・シネクドキの3つの比喩用法に基づいて「顔」の意味拡張関係図を作成する。本稿でのメタファー・メトニミー・シネクドキの定義は籾山（2009）に従う。

メタファー：

二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩表現。類似性として形などの外見の類似性（例：食べ過ぎてブタになる）、性質などの抽象的な類似性（例：今の職場は天国／地獄だ）などが挙げられる。

メトニミー：

二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、本来は一方の事物・概念を表す比喩のことを指す。（例：部屋を片付ける、背中を流す）空間的な隣接の特殊なケースも存在する。（例：手が足りないから手伝って欲しい）

シネクドキ：

本来はより一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆に、本来はより特殊な意味を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。シネクドキには「広い意味から狭い意味に」（例：花見に行く）「狭い意味から広い意味に」（例：お茶を飲みに行く）という二つの方向がある。

上記の定義に基づき、2.4節で述べた多義語「顔」の5つの意味の拡張メカニズムは以下の通りに認定する。

表2　本研究の意味拡張メカニズム

要素	意味拡張メカニズム
①	基本義

②	メトニミーによる拡張
③	メタファーによる拡張
④	メトニミーによる拡張
⑤	メタファーによる拡張

第三章　調査概要

前章で述べた通り、管見の限り多義語「顔」に焦点を当て、データをもとに実証的に行った研究は多くない。本稿では、多義語「顔」を研究するため、コーパス検索アプリケーション『中納言』（バージョン 2.4.5）を利用して、『現代日本語書き均衡コーパス』（BCCWJ）（データバージョン 2020.02）を検索した用例を分析対象とする。キーを語彙素「顔」に指定して検索した結果、「顔」に関する例文は 39,604 例が見つかった。これらの例を全て見るのは時間的に厳しいため、本稿ではエクセルの RAND 関数で乱数を発生させることで、39,604 例からランダムに 500 例を抽出し、「顔」の各意味の出現数と出現割合を調査する。また、抽出した 500 例を客観的、かつ正確に分析するために KH Coder3 を使用しテキストマイニングを行った。KH Coder では語を自動的に取り出すことで分析者の主観を取り除くことが可能になる。500 例から抽出した語を調査するため、ツール「抽出語」の「抽出語リスト」から語の前後の共起成分の解析を行った。

『現代日本語書き均衡コーパス』（BCCWJ）とは現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために作成されたコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』には書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律など計 13 ジャンルからなり、総語数（短単位語数）1 億 430 万語のデータが格納されている。そのうち小説は 6 割前後、ブログ、知恵袋は 1 割前後を占める。

KH Coder とは、日本学術振興会（大阪大学）の樋口耕一氏によって製作された内容分析およびテキストマイニング用のフリーソフトウェアである。樋口（2011）は KH Coder が自由記述による文書形式のデータに含まれる語を自動的に切り出し、多変量解析するによって全体を要約提示することがで

き、文書全体の傾向を把握することができると述べている。いかなる語が抽出されているかを検索する機能や、元のテキストデータ中でどのように語が用いられているか文脈を確認するためのコンコーダンス機能が備わっていることで、文脈に立ち返り確認することができるため、計量分析と原文解釈とを循環させる分析プロセスを実践でき、分析者の観点を生かしつつ客観性を両立させることが可能である。

本稿ではまた、NINJAL-LWP for BCCWJ（通称 NLB）を使用して「顔」と共起するコロケーション、ここでは動詞・形容詞・名詞に絞って分析する。国広（1985）によると、コロケーションとは日本語の「連語」の概念に近く、一般に「語と語の習慣的な共起関係」を意味すると述べている。2つ以上の語の共起は、連結の強さと意味の透明性によって 3つの段階があるとしている。最も強い語の共起は「耳が遠い」のように、語と語の結びつきが固定的であり、個々の語の意味から全体の意味が解釈できない「慣用句」である。次の段階は「月が青い」のように語と語の結びつきが固定的であるが、個々の語の意味から全体の意味が解釈できる制限結合であり、一般に「連語」や「コロケーション」と呼ばれる。最後の段階は「風が強い」のような「自由結合」と呼ばれるもので、個々の語の意味によって自由に結合できるものである。本稿では共起関係を広く捉え、慣用句、連語、自由結合ともコロケーションとして扱うことにする。

NLB は国立国語研究所が構築した『現代日本語書き均衡コーパス』を検索するために、国立国語研究所と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。NLB はレキシカルプロファイリングという手法を用いたコーパス検索ツールであり、名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのが最大の特長である。ただし、中納言による検索結果と検索対象範囲にやや違いがあり、NLB には、著作権上の理由から、約 94万語の新聞データが格納されていない。また、形態素解析する際、使用された辞書も UniDic 辞書を利用した『現代日本語書き均衡コーパス』と違い、NLB は IPA 辞書を利用しているため、語の品詞分類等の面で両者にはやや違いが見られる。本稿では NLB に依拠して例の使用傾向を探る。

第四章では上記 3つのツールでまとめたデータを用いて、多義語「顔」の

使用傾向を探り、考察を行っていく。

第四章　調査結果と考察

第四章では前章で記載したツールを利用し、その調査結果のまとめと考察を行っていく。品詞ごとの実態調査を行う中で漢字表記・カタカナ表記・ひらがな表記が混在している場合がある。混在している場合に限りカタカナ表記で記載する。

4.1 意味ごとの出現頻度

BCCWJ にてランダムに抽出した 500 例を対象に、多義語「顔」の基本義・拡張義ごとの出現傾向を調査し、その調査結果を表 3 に示す。表 3 における各意味の番号は 2.4 節の意味番号に対応する。

表 3 「顔」の 5 つの意味の使用傾向（500 例）

各意味	①	②	③	④	⑤
出現数	151	64	185	82	28
割合（%）	30%	13%	37%	16%	4%
使用例	・整った顔 ・顔を洗う	・可愛い顔 ・カッコいい顔	・浮かない顔 ・暗い顔	・顔を出す ・顔をそろえる	・会社の顔 ・球界の顔

表 3 から分かるように、基本義①より多く出現していたのは拡張義③の表情や態度などを指す「顔」であった。前には「冴えない」「渋い」のようなネガティブ要素の強い形容詞が共起しやすい傾向があり、後ろには「―をする」が共起しやすく、この「―をする」には人や物の性質を表す用法として用いられている。③は人の情緒や感情を表す大きな要素であり、人間は感情の起伏で顔色が変わりやすいということ、「顔」は人間の感情のシンボルであることから出現傾向が高いと言えよう。

逆に使用頻度がもっとも低かったものは拡張義⑤の地位や名誉などを指す「顔」であった。前には「チーム」や「会社」のようなある特定の組織を指す名詞が共起しやすい。後ろには「である」のような「名詞＋断定の助動詞」が主に使用されていた。この拡張義は集団の中での象徴的な一人を指し、日常的

に使うものではないことから使用頻度が低いと考えられる。

次に、4.2節～4.4節まで、NLBを使用して「顔」と共起頻度の高い動詞・形容詞・名詞コロケーションに絞って調査し、実証的に「顔」の文法的振る舞いを見ていく。また、「名詞＋名詞」の複合名詞はNLBでは頻度が73例とデータとして不十分なため、BCCWJを用いて調査を行った。

4.2 多義語「顔」と共起しやすい動詞

多義語「顔」の後ろに共起しやすい動詞を調査したところ、総例数18,900例、異なり語数は延べ437種類だった。そのうちの上位10個を表4に示す。表4には語彙は要素カテゴリー、件数は頻度カテゴリーに記載し、大きなデータを簡易的な表にまとめる。以下同様に示す。

表4　顔＋助詞＋動詞

要素	頻度
―を見る	2,001
―を出す	1,162
―を上げる	840
―になる	555
―を合わせる	519
―を向ける	432
―を背ける	282
―を覗き込む	259
―で言う	236
―を洗う	217

NLBにてグループ「助詞＋動詞」より要素と頻度を調査し、そこから考察を行う（表4）。

動詞と共起しやすい「顔」の意味拡張は主に④の顔ぶれやメンバーを指す意味の「顔」である。上記表4ではその意味に相当するものは「－を出す」と「－を合わせる」である。これらに共通するものとしては複合名詞にもなるということである。「顔を出す」は「顔出し」、「顔を合わせる」は「顔合わせ」という複合名詞に語構成が変化することが可能である。

共起動詞からは特にメトニミーによる意味拡張が顕著であった。「顔を見る」は基本義で「相手の顔を視覚越しに見ること」であるが、そこから「相手

の顔を視覚越しに得た情報を元に考察し、相手の気分や顔色を伺う」という意味に転義する。同様に「顔を上げる」にも転義が発生し、「顔が物理的に上を向く」から「気分が落ち込んでいる状態から立ち直るために元気を出すさま」として「顔を上げる」と用いることがある。

4.3 多義語「顔」と共起しやすい形容詞

多義語「顔」の前後に共起しやすい形容詞を調査したところ、前に共起する形容詞の総例数は 1,858 例、異なり語数は 95 種類、後ろに共起する総例数は 1089 例、異なり語数は延べ 193 種類である。その中の上位 10 個をそれぞれ表 5、表 6 にて示す。

表 5 形容詞＋顔

要素	頻度
いい―	107
青い―	94
怖い―	86
青白い―	79
白い―	77
難しい―	74
渋い―	69
美しい―	67
涼しい―	66
暗い―	60

NLB でグループ「形容詞＋顔」より要素と頻度を調査し、そこから考察を行う（表 5）。

表 5 から分かるように形容詞「いい」がもっとも「顔」と共起しやすいものであった。この形容詞には 3 つの意味拡張が考えられる。1 つは目鼻立ちがしっかりしており整うさま、基本義①に当たる（例：あの人は顔たちが綺麗でいい顔をされている）。2 つ目はビジュアルが綺麗なさま、メトニミー拡張②に当たる（例：彼氏が良い顔をしているのが自慢である）。3 つ目は表情などに翳りが見えず、シャキッとしているさま、メタファー拡張③に当たる意味用法である（例：一仕事終えて良い顔をしている）。「顔」は「いい」と共起する場合に多義的な意味を持つことが分かった。

共起する形容詞に現れた特徴として、「青い」「白い」「赤い」といった色を表す形容詞が共起しやすいことが挙げられる。「青い顔」は主に血色が悪い意味で使われ、具体的な状況だと具合が悪い時、冷や汗をかいているときに用いられる。「白い顔」は心身ともに健康的でありながら肌が白いとき、顔に血色がなく蒼白に見える遺体などのことを指す。「赤い顔」だと照れている時、恋をしているときである。「青い」では健康状態、「白い」では美容関係や健康状態、「赤い」では情緒的なものを指すことが調査によって分かった。他に挙げられる特徴としては、形容詞にはネガティブな意味を含むものが共起しやすいことが分かった（難しい、渋い、暗いなど）。

形容詞と共起しやすい「顔」の意味拡張にはメタファーによる拡張のものが多く、その中でも特に健康状態、表情を指すものが多かった。

次に NLB で「助詞＋形容詞」グループより調査し、そこから考察を行う（表 6）

表 6　顔＋助詞＋形容詞

要素	頻度
―が赤い	99
―がない	38
―が明るい	35
―にない	35
―が小さい	25
－が大きい	23
―がよい	21
―が可愛い	20
―が熱い	20
―が広い	18

表 6から分かるように「助詞＋形容詞」の調査結果では、要素として出現しやすい「顔」の意味拡張では、③の気分や感情を表すメタファーによる拡張が出現しやすいという傾向があった。要素としては「赤い・明るい・暗い」などが挙げられる。

「顔」は形容詞「ない」と共起する場合、これといった特徴がない人物を指す（例：この会議には顔のない役員が多くいる）。「ない」と共起する場合には「顔」が属するカテゴリーが人からモノに変化するメタファー拡張も起こる（例：あの顔のないスーパーマーケットはいつ潰れるのだろう）。

「顔」の大小を表す形容詞も共起しやすいことが分かった。文字通りに人の「顔」の面積などを指し示す場合に用いる（例：あの娘は顔が非常に小さい）。しかし、「大きい」という形容詞に限っては別の意味に転義し使用される場合がある。今回の使用調査で転義の「大きい」は使用されてはいなかったが、「顔が大きい」であたかも自分が偉い者であるかのような顔つきをしたり、悪事を働いても平然としている様子を表現したりする際にも使用される。（例：顔を大きくして歩く）「大きい」「小さい」のような空間的な量を表す形容詞の他に「狭い」「広い」も共起しやすいことが分かった。「顔が狭い」「顔が広い」の表現ではその人自身の社会的地位、人脈の広さ、人望などを指し示すことができる（例：あの人は顔が広い。あの人は社交的でないから顔が狭い）。つまり空間的な量を表す形容詞の後ろに共起する「顔」は当人の器や社会的地位を指し示すというメタファーによる意味拡張によって派生したものであるといえる。基本義①や拡張義②のような顔の前面や容姿を指し示すものは共起しにくいと言えよう。

4.4 多義語「顔」に共起しやすい名詞

多義語「顔」の前後に共起しやすい名詞を調査した結果、前に共起する名詞は異なり語数126種類、後ろに共起する名詞は総語数4713例、異なり語数は延べ435種類あった。その中の上位10個を表7、表8に示す。前に共起する名詞はBCCWJで調査したため、総語数は不明である。

表7　名詞＋顔

要素	頻度
フマン	154
コンワク	135
ウリザネ	90
シオ	88
ショウワ	52
シンパイ	32
マル	30
ワライ	26
ドウ	22
ハーフ	9

NLB にてグループ「名詞＋顔」を調査したところ、頻度 73 と傾向を測るにはデータが不十分なため、BCCWJ を使用して複合名詞を調査した（表 7）。

表 7 から分かるように「顔」の複合名詞として共起しやすい名詞には 2 つの傾向が見られた。1 つは不満、困惑，心配といった表情に翳りが見えるものである。「顔」は人の感情を表す象徴であり、その中でもネガティブな感情は特に判別しやすいことから高頻度にあると考える。2 つ目は瓜実・塩・昭和・ハーフ・童のような容姿の系統を指し示す名詞である。草食系男子や肉食系男子などは顔の他に言動なども含めて形容するが、瓜実・塩・昭和は顔の系統を目・鼻・口・肌の色などを含めた顔面の総合的評価を行い、それを元に形容する言葉である。また「塩顔」や「昭和顔」などの複合名詞は「塩」などの修飾語が変化をして成立した単語であるため、今回の調査対象外にあたる（他に「塩対応」などが挙げられる）。「童顔」というのは主に顔が幼い人の容姿を表し、その容姿の特徴には「丸顔」が挙げられる。つまり、「童顔」は「丸顔」から類似性に基づくメタファー拡張によって派生した語だと言えよう。なお、「童顔」は音読みで一語のため、厳密に言えば本研究対象外となる。

本稿での意味②、③に相当するものがほとんどで、「名詞＋顔」ではメタファー表現によって拡張された「顔」が特に使用されやすい傾向にあった。

表 8　顔＋の＋名詞

要素	頻度
―の前	106
―の表情	93
―の輪郭	40
―の筋肉	36
―の色	33
―の形	30
―の下	28
―の男	24
―の部分	23
―の作り	21

NLB にてグループ「顔＋の＋名詞」より要素と頻度を調査し、そこから考察を行う（表 8）。

表8から分かるように名詞の前に共起しやすい「顔」には主に2つの意味が用いられていた。1つには「―の前」「―の輪郭」で用いられる①の基本義である。2つ目には「―の表情」「―の筋肉」「―の色」で用いられる③の表情を指し示す「顔」である。「顔の筋肉」は主に表情筋を指し、その筋に何らかの変化がある場合には表情にも変化が起こる。その筋肉が硬直する場合は緊張、不安などが精神状態にあり、逆にほころんだり緩んだりする場合は安心、喜びなどが精神状態に表れている。人間の内側で変化する精神状態と表情筋の変化は同時に起こっており、これらはメタファー表現によって視覚を通じて捉えることができない内面の変化を表している（例：面接が終わり顔の筋肉が緩む）。「顔の色」は主に感情の起伏が起こることを指す。よくアニメーション動画などでキャラクターの喜怒哀楽の変化を視聴者に分かりやすく伝えるために、怒ったり恥ずかしく感じる時に顔が赤色になり、気分が悪くなったりした場合には顔は青色に変化する。現実ではアニメーション映像のように感情の起伏によって顔の色が変化するわけではない。恥ずかしさによって体温が上昇すること、恥ずかしいという内面の変化、悪寒や体調不良によって顔から活気が失せること、悪寒や体調不良などによって体温が悪化することが同時に起こることで、メタファーによる意味拡張で顔を心情の象徴と見立てて表現することが多い（例：病気が快方に向かい顔の色が良くなった）。

第五章　まとめ

本稿ではコーパス調査で得たデータから、多義語「顔」の使用実態を考察してきた。多義語「顔」は基本義「目・口・鼻などが存在している顔の前面」をはじめとし、本稿の分類でも4つの意味に拡張しているが、本稿の考察した範囲では、一番多く使われているのは基本義ではなく、拡張された転義「顔の様子、表情、顔つき、態度など」「顔ぶれ、成員、メンバー」であることが調査によって明らかになった。この結果から分かるように、多義語「顔」は心情の変化、顔ぶれなどを表す際に拡張して使用されることが多いと言える。

本稿の目的の一つである多義語「顔」がどのようなメカニズムによって意

味拡張が行われているのかについては、シネクドキを除いた2つの比喩的手法によって拡張されていることが本稿により明らかになった。顔のルックスや顔ぶれを指す「顔」はメトニミー拡張、表情や態度、地位や名誉を指す「顔」はメタファー拡張によって転義していると言えよう。もう一つの研究目的であるコロケーション情報を元に共起する品詞別の使用傾向については、本稿の「顔」の意味②「容貌・ルックス」、③「表情・態度」、④「顔ぶれ・成員」に対応するものがほとんどを占めていた。

筆者自身、論文執筆前に容姿などを表す「顔」がもっとも出現しやすいと考えていたが、実際にデータを分析すると基本義①「顔の前面」や拡張義②「容貌、ビジュアル」は頻度が比較的低いことが明らかになった。つまり母語話者の内省と使用実態には乖離が存在することもある。このことを鑑み、日本語教育現場において多義語「顔」の指導をする際、基本義のみを教えるのではなく、メトニミー拡張・メタファー拡張によって転義された「顔」の意味を説明し、典型的な例文も提示して説明することで多義語への理解を深められ、効率的な学習に繋がると考える。

本稿では多義語「顔」に焦点を当てて実態調査や考察を行った。しかし、日本語にはまだ数多くの多義語が存在し、それらについての実態調査が行われていないものも多い。本研究対象である「顔」もその多くある多義語の中の一部にしか過ぎない。今後の展望として、「顔」以外の多義的意味を持つ身体的部位の実態調査を行うことにより、身体的部位を表す語彙の認知言語学的考察を深めていくことができ、日本語教育にも役立つ。また、身体的部位の多義語だけでなく、その他の多くの多義語を調査することによって、意味拡張のメカニズムをさらに明らかにしていくことが可能になる。これらを今後の課題として取り組んでいく。

参考文献

有薗智美（2006）「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』9, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 ,pp.287-301.
https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/9/9-17.pdf

皆島博（2019）「英語の多義語 ”hand” の認知意味論的分析」『福井大学教育・人文社会系部門紀要』4巻 , 福井大学教育・人文社会系部門 ,pp.13-25. https://karin21.flib.u-fukui.

ac.jp/repo/bd10120403_cover._?key=JOPABM
国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』4巻（1）,pp.4-14.
田中聰子 , ケキゼ・タチアナ（2005）「顔と《ЛИЦО》:< 顔 > 概念の日露対照研究」『世界の日本語教育』15, 国際交流基金日本語事業部 , pp.103-116.
file:///C:/Users/ada08/AppData/Local/Packages/Microsoft.MicrosoftEdge_8wekyb3d8bbwe/TempState/Downloads/Sekai15_tanaka%20（1）.pdf
樋口耕一（2011）「計量テキスト分析の提案と必要なソフトウェアの開発」『訂正版シシオロジ』170号 , pp.102-108. https://www.jstage.jst.go.jp/article/soshioroji/55/3/55_102/_pdf/-char/ja
籾山洋介（2009）『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』研究社 .

参考辞書

金田一京助・佐伯梅友・新村出・時枝誠記・西尾実・久松潜一・諸橋轍次・山岸徳平（編集顧問）（2000~2002）『日本国語大辞典』（第二版）、小学館
松村明（編集）（2006）『大辞林』（第三版）、三省堂
松村明（監修）『デジタル大辞泉』（小学館）（2020年5月22日検索）https://daijisen.jp/about/index.html

使用ツール

KH Coder https://khcoder.net/
コーパス検索アプリケーション『中納言』（バージョン 2.4.5）https://chunagon.ninjal.ac.jp/
NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）http://nlb.ninjal.ac.jp/